

論理的な読解と表現を育成する指導プログラムの開発と検討

Development and Investigation of Classroom Program for Fostering Logical Reading and Writing

犬塚 美輪[†], 小柳 美智江[‡]
Miwa Inuzuka, Michie Koyanagi

[†]東京大学先端科学技術研究センター, [‡]横浜市立日吉台西中学校
University of Tokyo, Hiyoshidai-nishi Junior Highschool
miwainzk@aol.com

Abstract

We developed classroom teaching program for eighth grade students to foster their logical reading and writing skills. We focused on four elements: idea generation, others' viewpoint, structure, and connection to real world. We implemented the program once a week and it lasted six months. As the program progressed, the participants pointed out more inconsistency in other's essay. Also, they wrote longer essays, used more appropriate conjunctions, and consider other side of opinion in their essays.

Keywords — Logical reading and writing, classroom program, critical thinking.

1. はじめに

批判的思考は、認知心理学や認知科学における重要なテーマのひとつである。批判的思考という概念には、複数のスキル・態度が含まれている^[1]。本研究では、「題材（連続・非連続テキスト）を批判的に読解し、自らの意見を説得的に展開・表現すること」を「論理的読解と表現」と定義し、指導プログラムの開発と効果検討を行なう。

認知心理学の領域では、批判的・論理的な思考が自発的には行なわれにくく、教示を与えられた場合でも容易でないことが示されてきた^[2]。

教育的な見地からは、近年の国際学力テストの結果を受け、論理的読解や表現の重要性と育成の必要性が指摘されている。多くの関心が寄せられている一方で、具体的な指導方法の提案やその効果に関する検討は十分になされていない。実践レベルから提案されている指導プログラムもあるが、多くの場合、短期間であったり、効果の検討がなされないことが多い。そこで本研究では、長期間の指導を行ないその効果を検討する。

2. プログラムの概要

(1) 対象

ピアジェの思考発達段階理論では、抽象的・論理的思考が可能になる「形式操作期」は12歳以降だとされている。一方、前述したように、大人であっても自発的に批判的思考を展開するのが困難であることも示されている。したがって、論理的読解と表現に関する指導を受ける機会は、12歳以降の中等教育期に設けられることが重要であると考えられる。実際の公教育への適用を考えると、2年時に実施することを想定したプログラムへのニーズが高いと考えられた。そこで、本研究では、中学2年生を対象とした。

(2) 目標と構成要素

カリキュラム全体は全20回程度を予定し、それを大きく前期と後期に分け、下位目標を設定した。

まず、前期の下位目標は、論理展開が十分でなくてもよいので、「自分の意見やアイデアを、他者が分かるように述べること」とした。生徒たちは、他者に自らの意見を伝えるために書く、という経験が少なく、原稿用紙を前に、何も書けない生徒が少なくない。そこで、「たくさん書く」ことを奨励し、発想を促す指導を中心とした。

後期は、「日常的題材から批判的視点を学ぶ」ことを目標とした。批判的な検討を行ないやすくするために、日常的な題材であり、批判的な検討を行なうことの意義の見えやすい広告を用いた。後期では、このような日常的な題材で学習したことをもとに、学校場面で目にする題材についても批判的な思考・評価を行なうことを目指した。

論理的な読解と表現を構成する要素としては次

の4つの要素を取り上げた。まず、①「発想・創造」として、生徒の発想を促進する活動や働きかけを取り入れた。次に、②「視点」として、論理的な読解や思考のためには、反対の立場に立つことが重要であることを示し、練習を行なった。③「骨組み」では、文章の構造を明示的に指導し、それを意識した読解や作文を促した。最後に④「日常生活との繋がり」として、学問場面と日常場面とのつながりを示し、知識の活用を促した。

(2) 授業の内容

具体的な授業内容は、上述した要素のいずれかに焦点化しており、それが各期の目標のもとに統合されていく構成とした (Table 1. 参照)。

前期 (1~12回) では、他者に伝えることを意識する文脈として、新聞の読者欄への投書を行なった。発想の方法としてマッピングなどを指導し、掲載された投書への反対意見を検討させることで批判的な読解・表現のための視点を示した。作文の段落構成の枠組みに沿った作文の練習を行ない、最終的には実際に意見文を作成し投稿した。

プログラムの後期 (13~22回) では、日常的な題材として広告を取り上げ、批判的な読解・表現のための視点を学んだ。広告の中の事実と意見の区別や、意見のもっともらしさや説得力を検討した。その上で、自らの意見を支える根拠に注目させ、効果的な根拠のある文章を書く活動を行なった。その際、文の論理構造を的確に反映したことばと構成を指導した。

3. 結果と考察

1クラス (28名) に着目し、効果の分析を行なった。まず、読解の指標としては後期開始前と後期終了時に意見文の矛盾点や論理の飛躍を適切に指摘した数を評定した。対応のある t 検定の結果、

値 0.82) において適切な指摘の数が有意多かった ($p < .01$)。また、表現の検討では、前期と後期の意見文を比較した。対応のある t 検定の結果、文字数と、適切な接続詞の使用数、および反対意見への言及数において、後期の方が有意に高いことが示された ($p < .05$, Table 2.)。なお、同校3年生20名が同じ課題で意見文を書いたものと、対象生徒の前期の作文の文字数 (3年生平均 359.4字) と分かりやすさの印象評定 (3年生平均 2.75, 対象生徒前期平均 2.79) について対応のない t 検定を実施すると、文字数が有意に異なり ($p < .01$)、分かりやすさは有意な差はなかった。

以上の結果から、対象生徒が前期の時点で1学年上の生徒以上の量の文章を書くことができたと言え、表現の量の増加に重点を置いた前期の指導の効果が示唆される。さらに、前期から後期の指導によって、他者の視点を意識した論理的な文章が書けるようになったと判断でき、質的な向上が見られたと言えた。読解に関しても、論理性への着眼がより正確になされるようになり、本指導の効果が示された。

引用文献

- [1] 道田泰司 (2000). 批判的思考の諸概念: 人はそれを何だと考えているか? 琉球大学教育学部紀要, 59, 109-127.
- [2] Hays, J. N., & Brandt, K. S. (1992). "Socio-cognitive development and student performance on audience-centered argumentative writing." In M. Secor & D. Charney (Eds.) *Constructing Rhetorical Education*, pp. 202-229. Carbondale: Southern Illinois University Press.

Table 1. 授業構成要素と具体的な指導内容

	発想・創造	視点	骨組み	日常生活との繋がり
前期	発想法, マインドマップ	文章に「つっこみ」を入れる	段落の働き	新聞の投書
後期	—	事実と意見, 根拠の「良さ」	根拠の提示	広告

Table 2. 意見文の評定 (SD)

	文字数	適切な接続詞数	反対意見の言及数
前期	442.14 (63.50)	2.39 (1.83)	0.25 (0.59)
後期	511.86 (126.96)	4.39 (2.27)	0.75 (0.75)